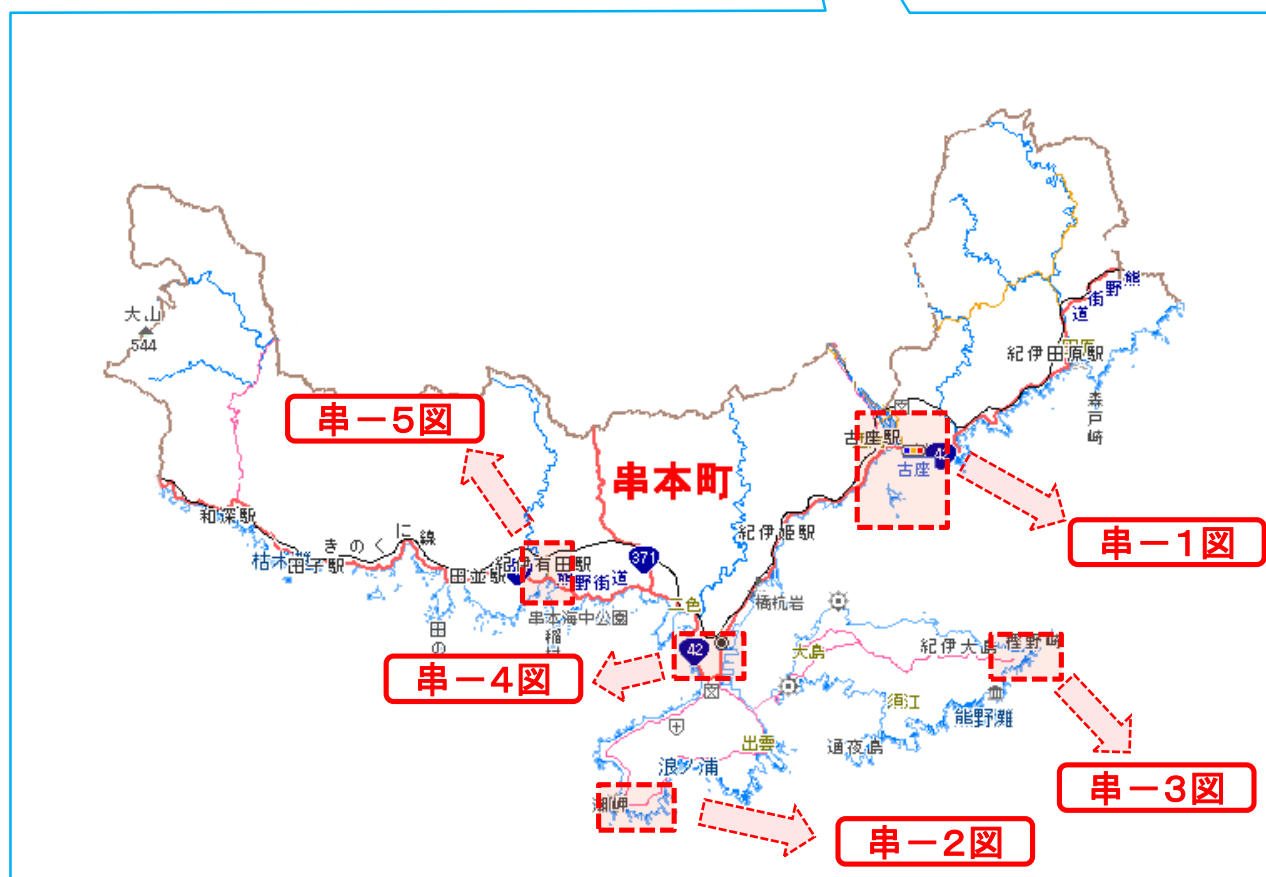


① 申請者	◎和歌山県(新宮市・那智勝浦町・太地町・串本町)	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
「鯨とともに生きる」			
④ ストーリーの概要(200字程度)			
鯨は、日本人にとって信仰の対象となる特別な存在であった。人々は、大海原を悠然と泳ぐ巨体を畏れたものの、時折浜辺に打ち上げられた鯨を食料や道具の素材などに利用していたが、やがて生活を安定させるため、捕鯨に乗り出した。			
熊野灘沿岸地域では、江戸時代に入り、熊野水軍の流れを汲む人々が捕鯨の技術や流通方法確立し、これ以降、この地域は鯨に感謝しつつ捕鯨とともに生きてきた。当時の捕鯨の面影を残す旧跡が町中や周辺に点在し、鯨にまつわる祭りや伝統芸能、食文化が今も受け継がれている。			
			
紀州太地浦鯨大漁之図・鯨全体之図			
 古式捕鯨高塚連絡所跡  河内祭の御舟行事			

市町村の位置図



7 古座組鯨方石宝

1 河内祭の御舟行事

2 九龍島

構成文化財の位置図(串本町・その2)

串-2図



構成文化財の位置図(串本町・その3)

串-3図

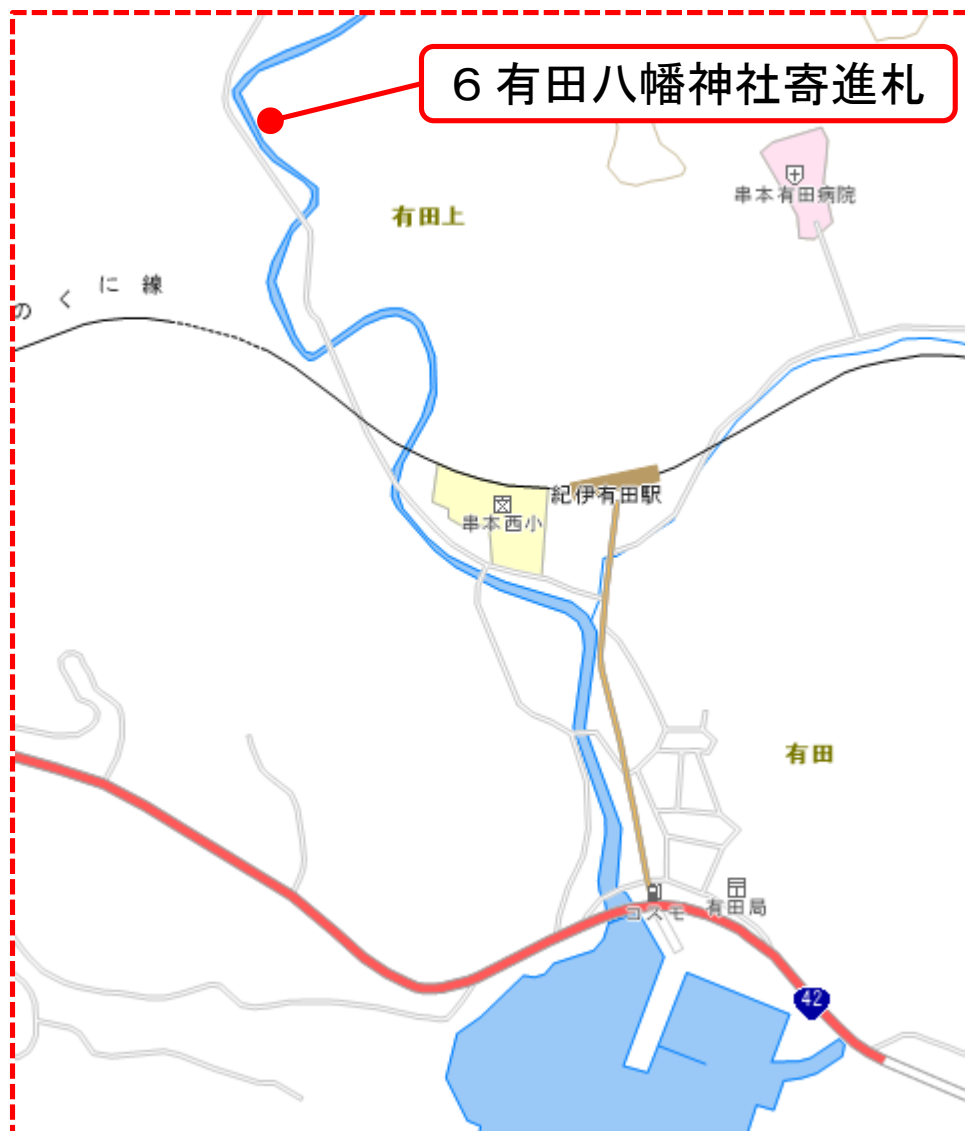


5 串本町史編纂資料

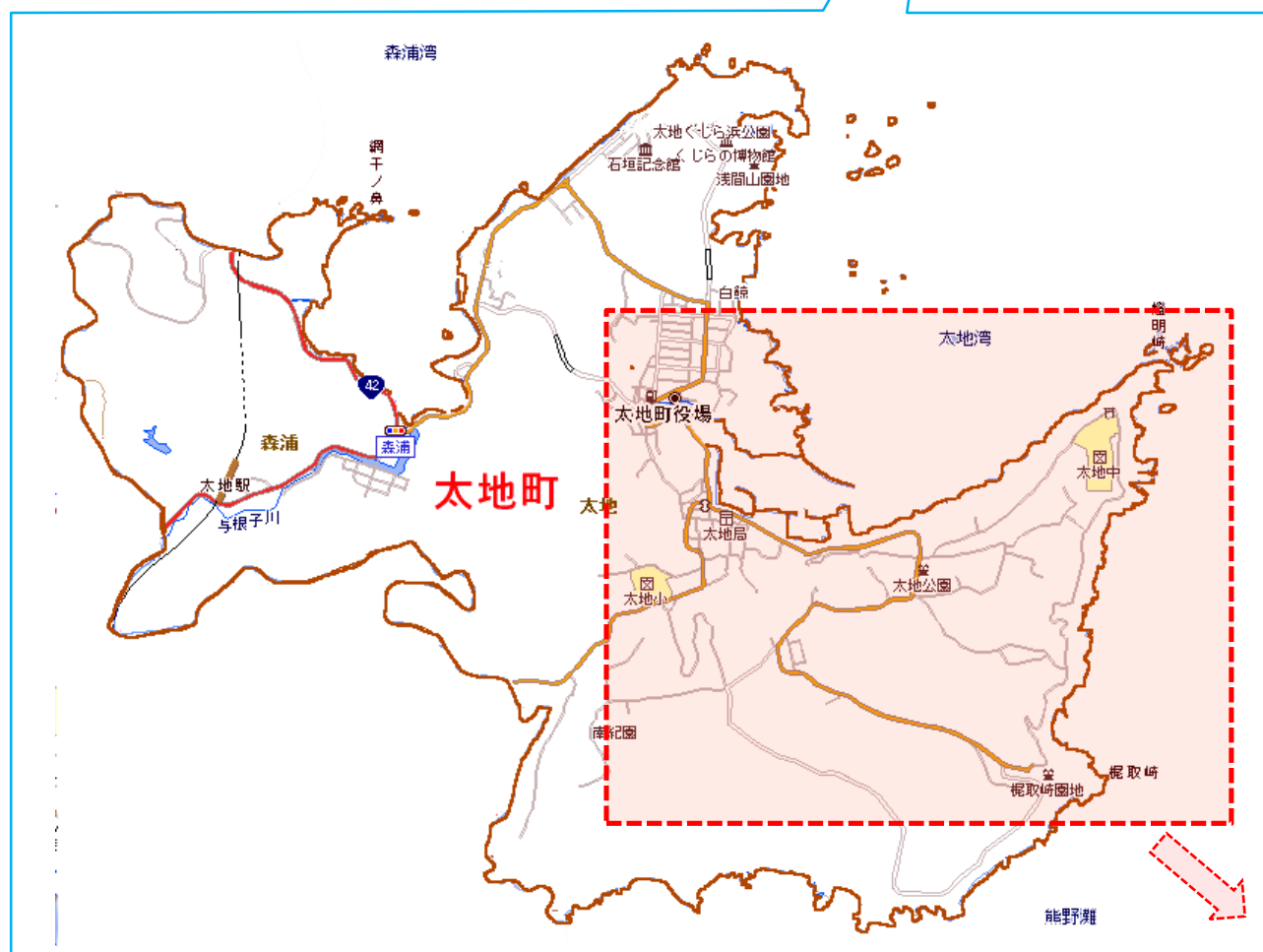


構成文化財の位置図(串本町・その5)

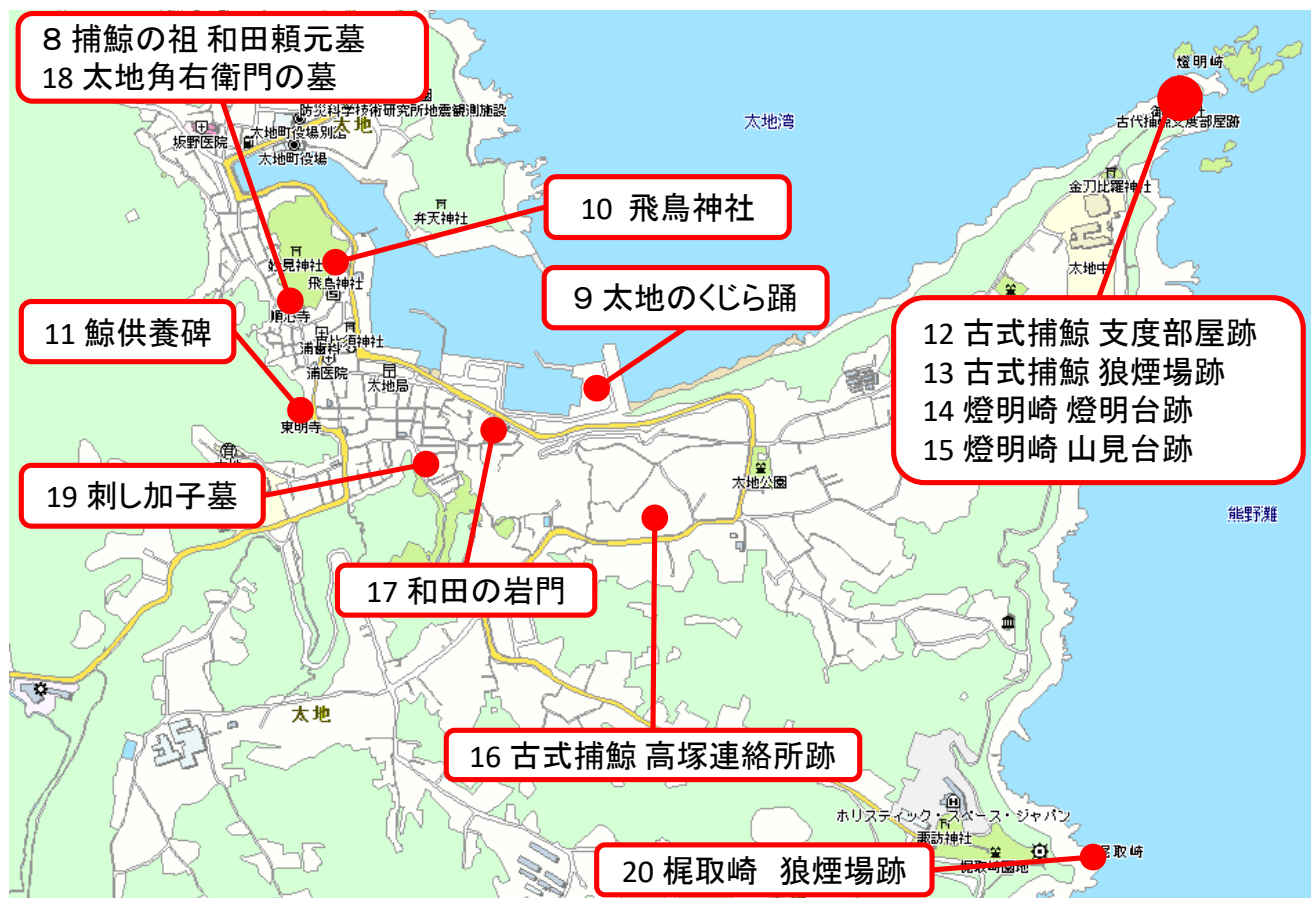
串-5図

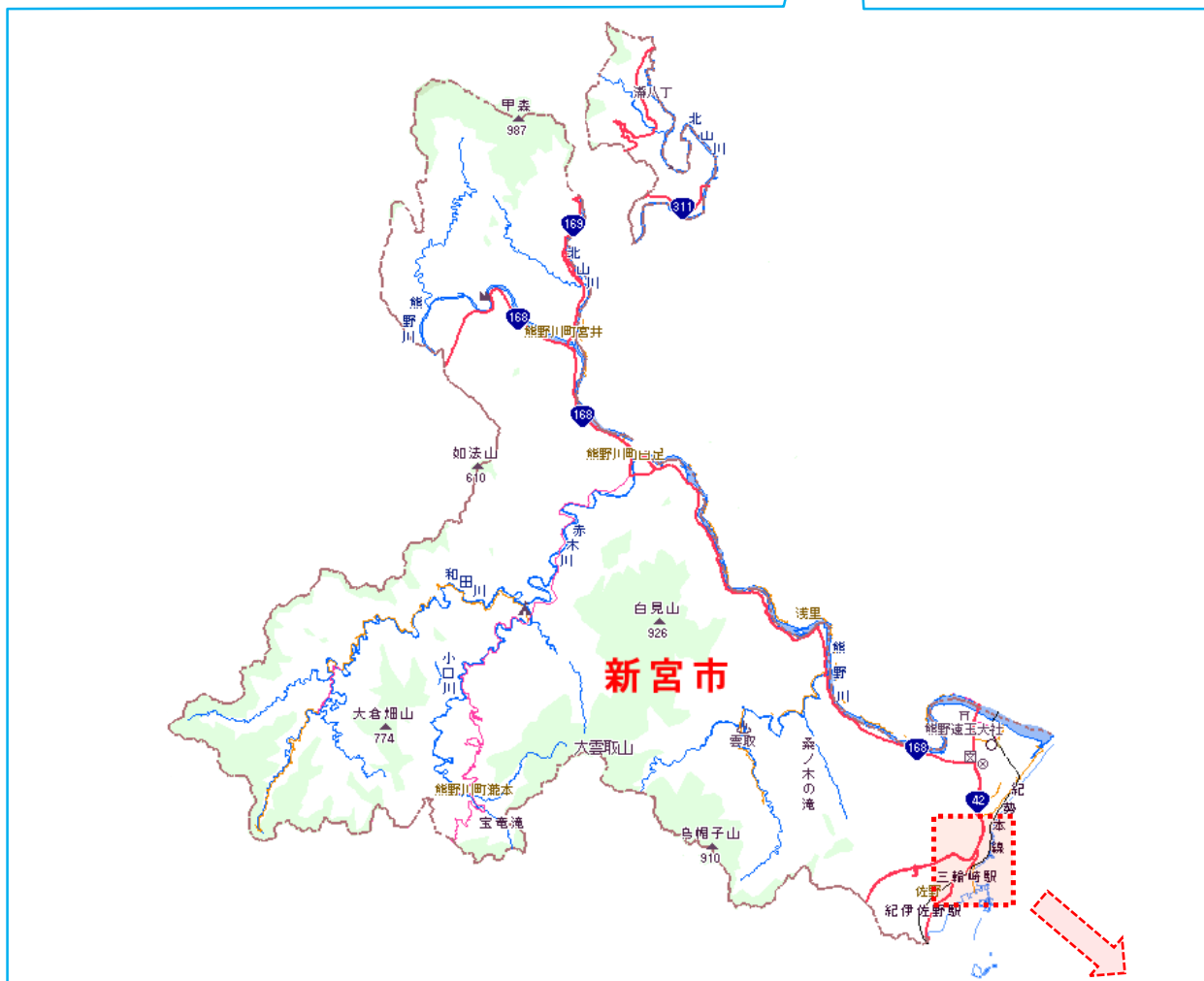


市町村の位置図



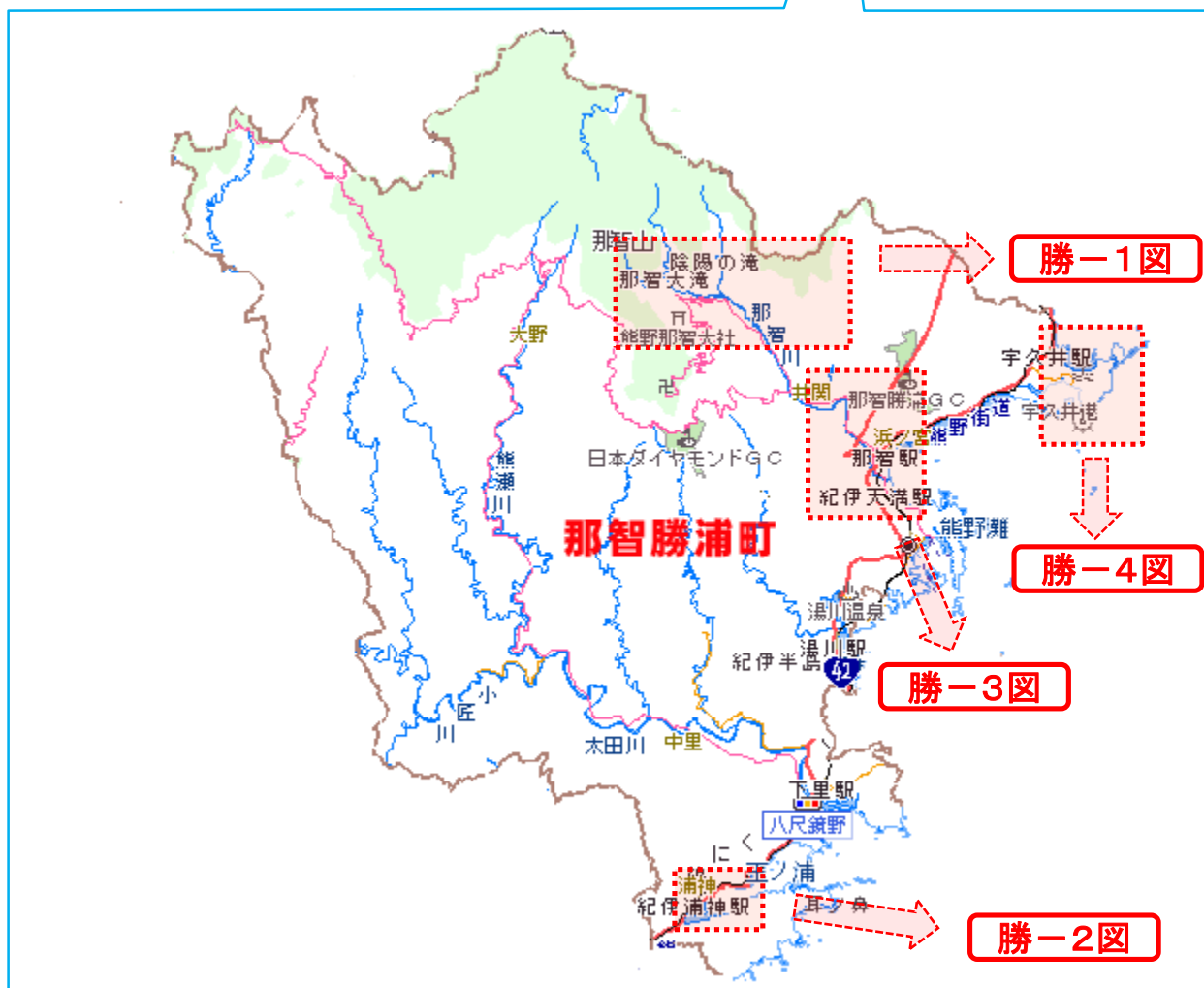
構成文化財の位置図(太地町)





構成文化財の位置図(新宮市)





A map of the area around Aikawa Daisetsu-ji temple. The map shows the Naga River (那智川) flowing from the top left towards the bottom right. To the left of the river is Naga Mountain (那智山). A red line indicates a path or boundary, with a red dot marking the location of the fish spirit offering stone (魚霊供養碑) near the temple (青岸渡寺). Other labels include '那智大滝' (Naga Great Falls), '那智原松林' (Naga Plain Pine Forest), '那智山浄化センター' (Naga Mountain Purification Center), '夫婦杉' (Fufu杉), '大門坂' (Daimonbake), '熊野那智大社' (Kumano Naga Daijingu), and '那智山局' (Naga Mountain Station). A red box highlights the text '26 青岸渡寺の魚霊供養碑'.

[illegible]

構成文化財の位置図(那智勝浦町・その2)

勝-3図



構成文化財の位置図(那智勝浦町・その3)

勝-4図



ストーリー

「鯨とともに生きる」

鯨は、古来より、日本人にとって富をもたらす神“えびす”であった。浜辺に打ち寄せられた鯨の肉を食し、皮や骨、ひげで生活用品を作るなど、全てを余すことなく利用してきた人々は、この“海からの贈り物”に感謝し崇めながらも、やがて自ら捕獲する道を歩み始める。

熊野灘沿岸地域では、江戸時代初期に組織的な古式捕鯨（網で鯨の動きを止め、鉋を打つ漁法）が始まり、地域を支える一大産業に発展した。現在も捕鯨は続けられ、食・祭り・伝統芸能などが伝承され「鯨とともに生きる」捕鯨文化が息づいている。

《古式捕鯨の歴史》

熊野灘沿岸は、背後に急峻な熊野の山々を擁し、橋杭岩（はしくいいわ）などの岩礁が目立つリアス式海岸が続いている。その海岸近くを、黒潮が最大4ノットの速さで南方から北へ向けて流れ、多くの海の幸をもたらしている。



紀州熊野浦捕鯨図屏風

この地域は、鯨が陸の近くを頻繁に回遊すること、またその鯨をいち早く発見することのできる高台、捕った鯨を引き揚げることのできる浜という、古式捕鯨にとって最も重要な地理的要件を備えていた。

そして、人々は古くより生きる糧を海に求めたため、造船や操船に秀で、泳ぎに長けており、海に関する知識が豊富であった。これは、この地域の人々が、古くに熊野水軍として名を馳せ、源平の戦いでは海上戦の勝敗を左右する活躍をしたことなどからもわかる。

江戸時代、この能力を活かし、新たな産業として着手したのが捕鯨である。最大の生物である鯨を捕獲するには、船団を組み、深さ約45mから60mにも及ぶ網で鯨を取り囲み、鉋で仕留めるとい、他に類を見ない大がかりな漁法が必要であった。命の危険を伴うこの漁は、勇敢さと統一ある行動が求められた。この意味で捕鯨は、水軍で培われた知識と技術が、そのまま有効に活用できる漁であり、その壮大さは「紀州熊野浦捕鯨図屏風」などに生き生きと描かれている。



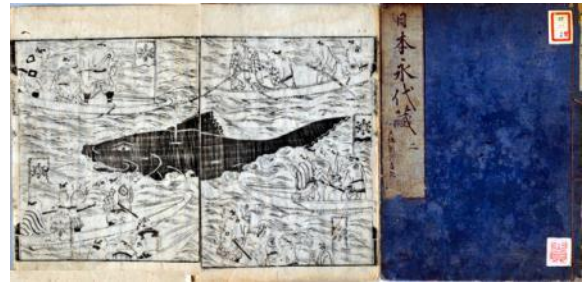
紀州太地浦鯨大漁之図

漁においては、500名を超える人々が役割を分担し、地域を挙げて捕鯨に従事していた。その役割は、鯨を見張り到来を知らせるほか不足資材や漁の状況等の情報の伝達をする者（山見（やまみ））、鯨に網を掛ける者（網舟（あみぶね））、鉋を打つ者（羽差（はざし））、仕留めた鯨を運搬する者（持双舟（もつそうぶね））、操業中各舟で不足した資材・食料を運搬する者（納屋舟（なやぶね））、また資材の管理や修繕を行う者（大納屋（おおなや））など多岐に渡っていた。

解体・加工は、「鯨始末（しまつ）係」が担った。鯨始末係は、鯨を引き上げるために轆轤（りくろ）を回す“頭仲間（かばちなかま）”、解体をする“魚切（うおきり）”、骨や皮などを釜煎りし鯨油を採取する“採油係”などに細分化され、総勢80余名で構成された。彼らは、肉の大半を塩漬けにして樽詰で出荷し、ヒゲや筋は

道具の素材とし、採油後の骨や血液の粉、胃の中の食物等は肥料とするなど、持てる知識と技術を發揮し、巨体の全てを活用した。

鯨は、“一頭で七郷が潤う”と言われ、当時セミクジラ1頭で約120両にもなり、年間95頭捕れた天和元年(1681年)には、6,000両を超す莫大な利益をもたらした。このことは、遠く離れた大阪にも伝わり、井原西鶴の著書「日本永代蔵」には、鯨を取って得られる金銀が、使っても減らないほど蓄えられ、檜造りの長屋に200人を超す漁師が住み、船が80隻



日本永代蔵 巻二

もあり、鯨の骨で造られた三丈ほどの「鯨鳥居」があるなど、この地域の繁栄ぶりが記述されている。

捕鯨が発展を遂げた背景には、捕鯨という一次産業にとどまらず、解体や加工、鯨舟を造る船大工、鉾や剣を作る鍛冶屋、浮き樽を作る桶屋、販売・経営を司る支配所など、二次・三次にも及ぶ広い業種が関わり、地域全体が利益を享受できるシステムを構築していたことが挙げられる。

《捕鯨が育んだ文化》

この地域には、多くの鯨にまつわる祭りや伝統芸能が今も受け継がれている。飛鳥神社の「お弓祭り」や塩竈(しおがま)神社の「せみ祭り」では、的に取り付けられた「せみ」(セミクジラを模した木や藁わらで作られたもの)という縁起物を用い、豊漁や航海の安全を祈願している。「河内祭(こうちまつり)」のハイライトは、豪華に飾り立てた鯨舟とぎふねの渡御であり、かつて捕鯨がこの地域の生活を担う誇るべき産業であったことを物語っている。



塩竈神社のせみ祭り



三輪崎の鯨踊

また、鯨踊は、かつて大漁を祝う鯨唄の調べとともに、勢子舟(せこぶね)に渡した板の上に座したまま、あるいは浜で舞っていたものだが、この踊りにおける一糸乱れぬ動きは、鯨との死闘を見るようである。新宮市や太地町では、多くの小学生が、学習の一環としてこの踊りを習い、次の担い手となって継承しており、今では神事の際や祭りで披露し、郷土芸能として浸透している。



河内祭の御舟

平素の生活においても、今も続く捕鯨により得られた肉は、郷土の味として定着している。

熊野灘沿岸の各地には、古式捕鯨時代の山見台跡や狼煙(のろし)跡、総指揮を行う支度部屋(したくべや)跡などが残り、当時の勇壮な漁の様子を想像できる。

また、太地漁港周辺に残る集落全体を取り囲む石垣の一部や、集落の入り口に当たる場所にあった“和田の岩門(せきもん)”などは、かつて地域が一つの共同体として捕鯨に取り組んでいた面影を今に残しており、江戸時代以降、この地域の産業と文化の根幹であった古式捕鯨の名残を今も伝えている。



燈明崎山見台跡

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1	河内祭の御舟行事 こうちまつり みらね	国重要無形 民俗	祭りのハイライト舟渡御 (ふなとぎよ) に登場する装飾された鯨船が、かつて捕鯨が地域の生活を担う誇るべき産業であったことを今に伝えている。	串本町
2	九龍島 くろしほ	国名勝	熊野灘沿岸の人々が、捕鯨につながる熊野水軍として活躍した時代に拠点のあった島であり、捕鯨が育んだ文化の一つ「河内祭り御舟行事」の舞台となる古座川 (こざがわ) 河口に位置し、祭りにとって聖なる場所とされる。	串本町
3	潮岬の鯨山見 しおのみさき くじらやまみ	未指定	古式捕鯨にとって最も重要な施設である山見台があった跡であり、かつて、古座鯨方 (こざくじらがた) の拠点であった。岬の先端に位置し、熊野灘を沖合まで広角に見渡せる。	串本町
4	檜野崎の鯨山見 かしのざき	未指定	古式捕鯨にとって最も重要な施設である山見台があった場所であり、かつての古座鯨方山見跡の名残を留めている。岬の先端に位置し、熊野灘を沖合まで広角に見渡せる。	串本町
5	串本町史編纂資料	未指定	(鯨文書) 古座鯨方に関する目録や日記などの文書類である。 (鯨絵巻) 鯨、勢子船、道具など古式捕鯨にかかわるものを描いた絵巻物である。絵は彩色を施している。 (喜多野又兵衛板書) 紀州藩から派遣された役員である喜多野又兵衛が不漁時に尽力したことの功績が記され、古座組鯨方石宝に納められていた3枚の板書である。 これらの資料は、古式捕鯨の様子や組織の状況などを今に伝えている。	串本町
6	有田八幡神社寄進札	未指定	有田八幡神社の遷宮時における寄進札である。鯨組と羽指の名前が見え、17世紀中頃の鯨方の様子を今に伝えている。	串本町

7	古座組鯨方石宝	未指定	古座組鯨方の信仰の対象であった石製の祠である。喜多野又兵衛板書が納められていた。往時における鯨方の信仰を物語っている。	串本町
8	捕鯨の祖 和田頼元 墓 そ わ だ よりもとのほか	県史跡	熊野灘地域において組織的捕鯨（古式捕鯨）を始めた和田頼元の存在が墓石から確認できる。	太地町
9	太地のくじら踊 たいじ おどり	県無形民俗	捕鯨が育んだ文化として、かつての古式捕鯨における行事を今に伝える。もとは「デーカイト」と呼び継承されてきた。踊手（おどりて）、唄手（うたいて）、太鼓打ちに分かれ、踊りは、綾棒（あやぼう）を銚（もり）に見立てて打ち振る「綾踊り」と、素手のまま太鼓のリズムにのせて鯨をつかみ取る「魚（さかな）踊り」の豪快な 2 曲からなり、いずれも座踊（ざおどり）である。2 隻の船の間に板を渡して踊る「船がかり」と、座敷に 2 段の舞台を組み踊る「座敷がかり」がある。	太地町
10	飛鳥神社 あすか	町指定 （建造物）	当神社で行われる「お弓祭り」（例祭）では、的に取り付けられた鯨に似せた「せみ」を奪い合うなど、捕鯨にまつわる伝統行事が今も受け継がれている。	太地町
11	鯨 供養碑 くじら	町史跡	古式捕鯨時代に建立された現存する唯一の供養碑として、かつて人々が鯨に寄せた思いをしのぶことができる。	太地町
12	古式捕鯨 支度部屋跡 したく べ やあと	町史跡	古式捕鯨が始まった頃に設けられた施設の跡で、明治以降に撤収されたが、古式捕鯨の名残を伝える。	太地町
13	古式捕鯨 狼煙場跡 のうし ばあと	町史跡	当時、沖の船団に連絡をする唯一の手段であった狼煙場の様子を今に伝える。	太地町
14	燈明崎 燈明台跡 とうみょうざき とうみょうだいあと	未指定	かつて新宮藩から派遣された役人が常駐し、鯨油を利用した燈明台が設けられていた。現在、絵図等を参考に灯明台が建てられている。	太地町
15	燈明崎 山見台跡 とうみょうざき やま み だいあと	未指定	古式捕鯨にとって最も重要な施設である山見台があった跡であり、現在、古式捕鯨図を参考に山見台が復元されている。	太地町

1 6	古式捕鯨 たかつかれんらくしよあと 高塚連絡所跡	町史跡	遠く離れた山見相互の連絡をするため、中継所としての役割を果たした。連絡所の位置は、実に綿密に計画され設けられている。	太地町
1 7	わだ せきもん 和田の石門	未指定	門の内側には、古式捕鯨の創始者である和田氏の広大な屋敷があったとされ、この地域一帯が、和田氏を中心とした共同体であったことを物語っている。	太地町
1 8	たいじかくえもん 太地角右衛門の墓	未指定	熊野灘地域における組織的捕鯨（古式捕鯨）に綱取り法を取り入れ、中興の祖となった太地角右衛門の存在が墓石から確認できる。	太地町
1 9	刺し加子墓	未指定	太地氏が加子の千百大（まさと）のために建立した墓である。太地鯨方（ たいじくじらかた ）内部における関係性を示す資料でもある。	太地町
2 0	梶取崎 狼煙場跡	未指定	当時、沖の船団に連絡をする唯一の手段であった狼煙場の様子を今に伝える。	太地町
2 1	みわさき くしらおどり 三輪崎の鯨踊	県無形民俗	捕鯨が育んだ文化として、かつての古式捕鯨における行事を今に伝える。捕鯨とともに始まり、浜で踊った大漁祝いが起源であると伝えられている。鉦に見立てた綾棒を腰に差し、両手に扇子をもち網を投げて鯨を取りまく形を表現する「殿中踊（ でんちゅうおどり ）り」と、終始座して綾棒をかかげ、上半身のみで鉦突きを表現する「綾踊り」の2曲がある。	新宮市
2 2	はざしなごんりゅう せきし 羽指中建立の石祠	未指定	側面に「〇〇〇組羽指中」とだけ読み取れる文字があり、この祠の所在する三輪崎地域の鯨方の羽指中が建立したものと考えられる。	新宮市
2 3	くしらやま みあと 鯨山見跡	未指定	沖を見るには絶好の場所に、現在石積がなされており、山見台があった跡である。この場所の南北に更に2か所の山見台があった記録があり、かつての三輪崎鯨方山見跡の名残を留めている。	新宮市
2 4	くしほ 孔島巖島神社の石造物	未指定	神社境内に、鯨方に関連する石造物が残っている。石灯籠は太地鯨方「角右衛門一類」太地与一頼任が奉納したもの、法華塔は三輪崎鯨方「御組」羽指中 彦太夫、新太夫ら建立したものであり、鯨方の信仰を物語る石造物である。	新宮市

25	三輪崎八幡神社の石灯籠	未指定	神社境内に太地与一が奉納した石灯籠が残る。鯨方の信仰を物語る石造物である。	新宮市
26	せいがんとし ぎょれい 青岸渡寺の魚霊供養碑	未指定	鯨をはじめとした様々な魚の命をいただくことに対する感謝の表れとして、供養をするという精神文化が、今なお引き継がれている。	那智勝浦町
27	しおがま 塩竈神社のせみ祭り	未指定	鯨にまつわる祭りとして当神社で行われる「せみ祭り」（例祭）では、的に取り付けた鯨に似せた「せみ」を、「せみ子」と呼ばれる白装束の子供が引き抜き走るといふ、捕鯨にまつわる伝統行事が今も受け継がれている。	那智勝浦町
28	浜の宮のお弓祭り	未指定	熊野三所大神社の例祭であり、神事の中で、的に取り付けられた鯨に似せた「背美（せみ）」を奪い合う、あるいは的の端を持ち帰るなど、捕鯨にまつわる伝統行事として、今も受け継がれている。	那智勝浦町
29	宇久井半島の山見台跡群	未指定	古式捕鯨にとって最も重要な施設である山見台跡があった跡であり、かつて、三輪崎鯨方（みわさきくじらがた）の拠点であった。	那智勝浦町

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文、県有形、市無形、等）。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

構成文化財の写真一覧

(串本町)

1 河内祭りの御船行事



4 檜野崎の鯨山見

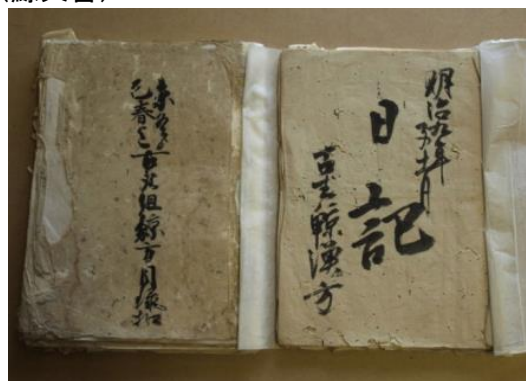


2 九龍島



5 串本町史編纂資料

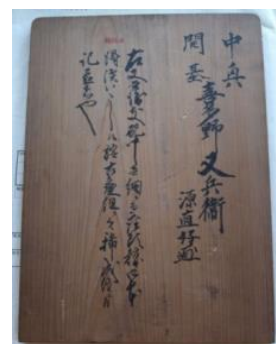
(鯨文書)



(鯨絵巻)



(喜多野又兵衛板書)



3 潮岬の鯨山見



6 有田八幡神社寄進札



7 古座組鯨方石宝



(太地町)

8 捕鯨の祖 和田頼元墓



11 鯨供養碑



9 太地のくじら踊



12 古式捕鯨 支度部屋跡



10 飛鳥神社



13 古式捕鯨 狼煙場跡



14 燈明崎 燈明台跡



17 和田の石門



15 燈明崎 山見台跡



18 太地角右衛門の墓



16 古式捕鯨 高塚連絡所跡



19 刺し加子墓



20 梶取崎 狼煙場跡



(新宮市)

21 三輪崎の鯨踊



24 孔島厳島神社の石造物



22 羽指中建立の石祠



23 鯨山見台跡



25 三輪崎八幡神社の石灯籠



(那智勝浦町)

26 青岸渡寺の魚霊供養碑



28 浜の宮のお弓祭り



27 塩竈神社のせみ祭り



29 宇久井半島の山見台跡群



日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
32	鯨とともに生きる

(1) 将来像 (ビジョン)

- 日本遺産「鯨とともに生きる」の舞台、紀伊半島の南東部、熊野灘沿岸地域では江戸時代初期に組織的な捕鯨が始まり、現在でも捕鯨が受け継がれています。地域には鯨と人の長い関わりを示す史跡が残り、鯨にまつわる様々な祭りや伝統芸能、食文化が受け継がれている地域である。

高齢化による人口減少が懸念される過疎化が進む地域であり、今後も「日本遺産」のブランドを活用し、交流人口を増加させることが地域活性化には極めて重要である。加えて、地域における文化の保存・活用・伝承につなげていきたい。

(県施策との連携)

- 和歌山県観光振興実施行動計画（観光振興アクションプログラム/年1回策定）では、世界遺産や温泉等、様々な視点で和歌山を売り出し観光振興につなげているが、その中の一つとして、『日本遺産』で和歌山を売り出す」をテーマに掲げている。和歌山県関係では「鯨とともに生きる」の他、7件の日本遺産（うち3件が和歌山県が事務局）が認定されており、それぞれ認知度向上、連携を図り、誘客につなげることにしている。

和歌山県では令和5年の「弘法大師空海御誕生1250年」、令和6年の「世界遺産登録20周年」、令和7年の「大阪・関西万博」といった観光産業にとって追い風となるビッグイベントが目白押しであり、この期間を「ダイヤモンドイヤー」として位置づけ、コロナ禍からの反転攻勢を目指していく予定であり、それらと連携した日本遺産プロモーションを展開することで、長期滞在、広域周遊に繋げる。

- 熊野地域は、「日本遺産の『熊野灘』」、「世界遺産の『紀伊山地の霊場と参詣道』」という「海の日本遺産」と「山の世界遺産」と2つの遺産エリアに加えて、「日本ジオパークの『南紀熊野ジオパーク』」では、大地と人の関わり合いを体感できるなど、様々な資産が点在しているエリアである。また近年、民間のロケット発射場が建設され、新たな産業・観光資源の拠点になるエリアである。

近年、観光客の嗜好が、従来型の観光スポットを巡る観光から体験型観光に移行していることから、本県が誇る海・山・川の美しい自然との触れあい体験として、熊野古道トレッキング、SUP、カヤック、カヌー等「体験型観光」の素材が豊富にある熊野地域は、更なる観光客増加が見込める地域である。加えて、紀伊半島の海岸線沿いを太平洋岸自転車道がナショナルサイクルルートに指定されるほか、熊野エリア（紀伊半島南部）をサイクリングで一周する「クマイチ」など、近年のサイクリングブームの拠点にもなり得る地域である。さらに、サイクリングルートの一部は鉄道と並行しており、J

R西日本が運行している「サイクルトレイン」を利用すれば、初心者でも気軽に楽しむことができる。

一方、歴史・文化・自然を学び、様々な体験が出来るエリアとして、教育旅行等を始めとする団体旅行についても誘致を促進していく。

また、大阪・関西万博、ワールドマスタースゲームズ等外国人観光客が増加する機会を見据えて、インバウンド誘客についても対策を講じていく。

今後も、日本遺産に加えてそれぞれの観光資源・体験メニューの認知度向上を図り、相互に連携して、プロモーションや周遊ルートの構築等を実施し、誘客促進、周遊の促進、滞在時間延長を促す取り組みを行う。本地域を訪問していただいた人達に対して、鯨とともに生活を行い、地域に根付いている文化・食事に触れる機会を増やすことで、地域における文化の保存・活用・伝承に繋げていく。

- 第三期 和歌山県文化芸術振興基本計画（令和3年4月）では、「文化資源の保全と活用による地域づくり」の中で、『日本遺産』のストーリーを活かした地域活性化の推進」を掲げ、和歌山県の日本遺産のストーリーを活用し、地域の活性化や観光振興を図り、あわせて、日本遺産の認知度向上に努めるとともに、構成する文化財の整備を進めることとしている。

（町施策との連携）

- 「鯨とともに生きる」の中心自治体である太地町では、「第2次まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和2年3月）」の中で「くじらを核とした産業振興で『豊かで活力のあるまち』を創造する」と基本目標を掲げている。くじら、自然、文化などの町独特の観光資源を活用するため、受入態勢や情報発信を強化や、観光や町内産業をつなげる総合的な構想「森浦湾鯨の海計画」を戦略的に推進するなど、さらにくじらを核として「豊かで活力のあるまち」を創造することを目標としている。
- 地域住民が、古式捕鯨の文化的かつ歴史的価値・歴史を理解し、伝える能力を身につけることにより、地域全体で観光客を受け入れる体制を整える
- 社寺・史跡等の構成文化財については適切な保存がなされているので、引き続き保存に努めていく。一方構成文化財に含まれる祭りや伝統芸能は、新型コロナウイルス感染症の影響により、開催中止に追い込まれる場合や、神事のみに縮小して催行するなどの影響が出ている。後世への伝承が課題であり、小学校での授業や開催方法の見直し等の検討を行い、後世への伝承を途切れさせることの無いよう取り組んでいく。

(2) 地域活性化計画における目標

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること						
指標①－A：構成文化財に含まれる祭りの来場者数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	12,560	60	0	12,560	12,560	12,560
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		河内祭の御船行事、太地のくじら踊（太地浦くじら祭）、三輪崎の鯨踊（三輪崎八幡神社例大祭）、浜の宮のお弓祭り、鹽竈神社のせみ祭りの来場者数。市町村からの報告により把握 新型コロナウイルス影響前の数値、2019 年の数値目標を設定				

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること						
指標①－B：太地町立くじらの博物館入館者数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度
数値	103,768	88,041	103,968 ※2022 年 2 月末時点	105,008 ※3 月以降に設定	106,058 ※3 月以降に設定	107,119 ※3 月以降に設定
目標値の設定の考え方及び把握方法		日本遺産について、学習・体験する複合的組織を設けていないが、構成市町である太地町が設置・運営している「太地町立くじらの博物館」において、鯨の生態・捕鯨文化の歴史等について、学術的見地から学習し、実際に鯨類について体感するだけではなく、絵付け体験等民芸品の体験もできる施設である。 2022 年は 2021 年の入館者数に対して 101%とし、その後も伸び率を 101%としている。くじらの博物館からの報告により把握				

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること						
指標②－A：アンケート調査の太地町に愛着を感じる住民の割合（単位：%）						
年度	実績			目標		
	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度
数値	69.3	—	—	—	—	72.3
目標値の設定の考え方及び把握方法		太地町における住民アンケートにより把握（5 年に 1 回実施）。 2024 年度の目標として 2019 年度に対して 3 %増加を設定 ※他市町でもアンケートを実施しているが、2022 年度～2024 年度の間に実施されないため、目標設定していない				

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：太地町立くじらの博物館入館者数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度
数値	103,768	88,041	103,968 ※2022 年 2 月末時点	105,008 ※3 月以降に設定	106,058 ※3 月以降に設定	107,119 ※3 月以降に設定
目標値の設定の考え方 及び把握方法		複合的な施設が協議会として設置していないことから、構成自治体である太地町立「くじらの博物館」の利用促進を図ることで、日本遺産に触れ・感じ・周辺の資産・体験施設等への誘客を促進する起点となるため。 くじらの博物館からの報告により把握。指標①－Bと同様				

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－B：太地フィールドカヤック体験メニュー利用者数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	806	※4,307	※3,854	814	822	830
目標値の設定の考え方 及び把握方法		シーカヤック体験およびSUP体験利用者数。太地町からの報告により把握。2019 年の実績に対して毎年 101%の伸び率を設定 ※2020 年、2021 年はコロナ影響により、和歌山県内の学校が県外への旅行を取りやめ、県内への旅行に変更したため、急激な利用増加となっている。2022 年以降はコロナ前の 2019 年の実績に対しての目標設定とする				

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－C：くじらの民芸品 絵付け体験利用者数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	1,406	※816	※2,013	1,420	1,435	1,450
目標値の設定の考え方 及び把握方法		民芸工房 抱壺庵における民芸品絵付け体験利用者数。太地町からの報告により把握 2021 年の実績に対して毎年 101%の伸び率を設定 ※指標③－Bと同様の考え方				

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：太地のくじら踊、三輪崎の鯨踊の小中学校での授業回数（単位：回）						
年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	27	23	23	23	23	23
目標値の設定の考え方 及び把握方法		太地町、新宮市における小中学校での授業回数。各教育委員会からの報告により把握。2021 年と同数を維持することを設定				

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：対象エリア内の観光客入込み数（単位：人）						
年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	4, 694, 550	3, 138, 148	※2022 年 6 月頃公表	3, 760, 000	3, 872, 800	3, 989, 000
目標値の設定の考え方 及び把握方法		2022 年度はコロナ影響前の 80%の設定とし、その後伸び率を103%としている。 和歌山県観光客動態調査により把握				

(3) 地域活性化のための取組の概要

将来像実現のため、協議会と地域の観光関連事業者、地元ガイド等が連携して取組を進める。

①人材育成及び活用

本地域は、前述のとおり、日本遺産に限らず、世界遺産、ジオパークと資源が豊富であり、相互に関連性を有するものである。そこで、それぞれのガイドに、日本遺産の見識を深める機会を設け、エリア全体のガイドとして活躍できるよう養成し、それぞれの場において案内等を実践してもらう。また、地域住民の認知度向上及び案内力強化のため、住民向けのセミナー等を開催することで、地域でのおもてなし力の向上・地域文化の大切さの再認識・誇り向上を図ることで、魅力を向上していく。

- ・ガイド養成講座の開催（インバウンド対応含む）
- ・観光客と接する宿泊事業者、飲食事業者を含む地域住民向けセミナーの開催（地域文化伝承、地域案内等のスキル向上）
- ・捕鯨文化が持続可能な取り組みであることの普及啓発

②体験観光の推進

地元太地町が整備を行っている「森浦湾くじらの海構想」では、SUP、シーカヤックといった新たな体験観光素材が開発されている。近年は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、和歌山県内の学校や近隣府県の学校が、くじらの博物館での鯨の生態・捕鯨文化の学習を取り入れた教育旅行の利用が増加しており、歴史教育やジオパークと組み合わせた教育旅行をさらに推進していく。個人旅行者にはくじらとのふれあい体験やサイクリング、熊野古道トレッキング、ガイドウォークなどを組み合わせた「体験型観光」推進し、引き続き、地域にある魅力ある資源の掘り起こしやインバウンドの受入整備を進めるとともに、当地域ならではの魅力を活かした体験メニュー造りを支援・促進することで、当地域での滞在時間の延長・周遊促進を図る。

- ・他テーマとの連携による観光商品づくり
- ・サイクリング等スポーツと連携による観光商品づくり
- ・地域の魅力ある資源を活用した体験メニューづくり・支援
- ・インバウンド向け多言語看板等の整備、商品造成支援

③食文化の推進

鯨肉を中心とした当地域ならではの食材を活用した新たなメニューの開発支援・周知広報を引き続き実施するとともに、既存の鯨肉を活用したメニューについても周知広報を図ることで、滞在時間の延長・消費拡大を図る。また太地町教育委員会では『食文化ストーリー』創出・発信モデル事業」として、鯨食文化のストーリー作成や発信事業等を予定している。

- ・鯨肉を活用した新たなメニュー造り支援
- ・鯨肉・地場食材を活用したメニューのある飲食店を紹介・情報発信
- ・太地町教育委員会「『食文化ストーリー』創出・発信モデル事業」との連携

④広域周遊の促進

和歌山県が推進する「ダイヤモンドイヤー」の機会を捉え、日本遺産のみならず、世界遺産やジオパークといった他の資産と連携して、地域全体の情報を発信することにより、当該エリアへの誘客を促進するとともに、ストーリーを巡るモデルプランの再構築や、インバウンド向けモデルプランの構築を行い発信する。

また、協議会構成自治体等独自の事業において、情報発信を行う際は、構成文化財の紹介と合わせて、日本遺産であることを発信する。

- ・他の資産と連携したプロモーションの実施
- ・雑誌等様々な媒体を活用した情報発信
- ・SNS等を活用した効果的な情報発信
- ・新たな旅行形態に対応する教育旅行メニューの提案・発信
- ・サイクリング等を活用した周遊ルートの構築・発信
- ・インバウンド向けモデルプランの構築

(4) 実施体制

和歌山県観光振興課に協議会の事務局を設置し、当該地域の関係団体等の意見も反映した多面的な事業を展開することを目的として、行政（県・市町の観光・商工部局、教育委員会）だけではなく、観光協会等観光関連団体、宿泊事業者、芸能保存会等関連する団体が構成組織となっており、また、交通事業者（西日本旅客鉄道株式会社和歌山支社）、旅行事業者（熊野御坊南海バス株式会社、（一社）日本旅行業協会和歌山地区）がオブザーバーとして参画していることから、それぞれの組織が連携して効果的に下記の取組を実施する。

また、インバウンド再開を見据えた多言語対応やキャッシュレス対応として、（公社）和歌山県観光連盟等と連携し、誘客の視点に立った情報発信等に努める。

現在の協議会体制に加えて、DMOや教育旅行に関する協議会、大学等と連携し、広域に連携できる体制を整えていく。

- ・ホテル、飲食関連事業者においては、新たな鯨肉を活用した料理の開発
- ・民間事業者においては、新たな土産品の開発
- ・体験事業者においては、新たな体験メニューの開発、インバウンドの受入体制
- ・観光関連団体、宿泊事業者、旅行事業者においては、新たな商品の造成、販売
- ・協議会事務局は、相互の情報を共有するとともに、効率的に事業運営を行うとともに、食、体験等の情報を効果的に発信する。

[人材育成・確保の方針]

地域において、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」日本ジオパーク「南紀熊野ジオパーク」といった資源もあり、それぞれに語り部団体も存在している。それぞれが、単独の語り部ということではなく、日本遺産を含め、それぞれの見識を深め、エリアの語り部として活躍できるよう、語り部の団体等に対しての研修及びモデルツアー体験等を実施することで、日本遺産の語り部の能力の向上を図る。

本県では、本エリアの一部を含む、世界遺産エリアにおいて、外国語により案内出来る「高野・熊野地域通訳案内士」の制度があり、外国人観光客への日本遺産についての知識向上を図り、受入体制を整える。

また、体験事業者も複数あるので、事業者とも連携して、体験メニューの開発、受入体制の充実を図ることで、継続して受け入れることのできる基盤整備を行う。

(5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

地元観光協会・商工会・地元事業者が観光を牽引する団体に該当するが、まだ日本遺産の取組のみで、自立・自走出来るほどの事業規模には至らない。

そのためには、引き続き、日本遺産の情報発信、受入環境整備、語り部の育成、体験メニュー、飲食メニュー、土産品の開発支援等に取り組み、前述の周辺資産との組み合わせによる観光消費額の増加を見込めるまでは、自治体からの支援を得て事業を継続していく。

一定の実績を作り、事業が軌道にのるようであれば、順次自治体からの支援を少なくし、観光関連事業者等民間事業者が運営の中心的役割を果たせるよう財源・事務の移行も念頭に置いて、事業を進めていく。

(6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

構成文化財に関しては、社寺・史跡等については、適切に保存がなされているので、引き続き適切な保存に努める。

一方、祭りや伝統芸能については、新型コロナウイルス感染症の影響で、開催を延期・中止に追い込まれたり、神事のみ縮小して催行するという事態が生じているほか、担い手の高齢化への対応など、後世への保存（伝承）を確実にするための施策を講じていく必要がある。

- ・祭りや伝統芸能については、学校関係者等とも連携を図り、小中学校等での体験を通し、次代の担い手となる人達への伝承に努める。
- ・祭りの主催者等との連携により、観光等で訪れた人に向けたセミナー等を開催し、衣装や所作等の紹介・解説を通し、祭りや伝統芸能に実際に触れて文化を体感してもらうことで、新たな担い手を確保する機会を創出する

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	協議会の組織整備		
概要	協議会の計画の円滑な実施のため、各自治体関係者以外に観光関係者や民間事業者も加えた体制を強化する		
	取組名	取組内容	実施主体
①	事業全体の統括を行う組織の整備	各自治体関係者以外に、観光関係者や民間事業者も加えた、協議会体制の強化 ・ 飲食店：新たな鯨メニューの開発 ・ 体験事業者：新たな体験メニューの開発 ・ 商工会：飲食店の支援 ・ 観光事業者：新たなメニューの販売 といった観点から意見を出し合い、事業内容を検討する	協議会
②			
③			
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	組織体制への行政組織以外の参画者数		9 団体
2020 年			9 団体
2021 年			9 団体
2022 年	組織体制への行政組織以外の参画者数		10 団体
2023 年	組織体制への行政組織以外の参画者数		11 団体
2024 年	組織体制への行政組織以外の参画者数		12 団体
事業費	2022 年：— 2023 年：— 2024 年：—		
継続に向けた事業設計	—		

(7) - 2 戦略立案			
(事業番号2-A)			
事業名		PDCAサイクルをまわす仕組みの整備	
概要		事業の進捗状況や効果把握のため、定期的な会議等を設定する	
	取組名	取組内容	実施主体
①	協議会総会、幹事会の開催	各事業の進捗状況や効果把握のため、年1回の総会を設定し、年間事業計画の策定を行う。および年2回の幹事会を設定し、各事業の進捗状況や効果把握を行い、事業の円滑な推進を目指す。必要に応じて、関係機関での情報交換を図る担当者会議等を適宜開催	協議会
②	事業の進捗状況・効果把握	協議会総会を年1回以上開催し、前年度の事業報告・収支決算、当該年度の事業計画・収支予算について報告を行う。総会の場合では、ビジョンに基づく効果的な事業内容であること、また、効果的に事業展開を図れるかどうかについて検討	協議会
③	事業計画の立案・進捗管理	ビジョンに基づき、長期・短期の事業計画を協議会幹事会で立案し、総会に諮る。 年度途中においては、協議会・構成自治体等が実施する事業について、情報交換・共有を図り、より効果的な事業展開を行い、成果が導き出せるよう複数回担当者会議を開催。	協議会
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	総会、幹事会の開催実績		総会1回
2020年			総会2回
2021年			総会1回
2022年	総会、幹事会の開催実績		総会1回、幹事会2回
2023年	総会、幹事会の開催実績		総会1回、幹事会2回
2024年	総会、幹事会の開催実績		総会1回、幹事会2回
事業費		2022年：—	2023年：— 2024年：—
継続に向けた事業設計		—	

(7) - 3 人材育成			
(事業番号 3 - A)			
事業名	日本遺産を活用する人材の育成		
概要	日本遺産を活用する人材育成のため、すでに地域で活躍している人材を中心に日本遺産ガイド研修等の教育を実施する		
	取組名	取組内容	実施主体
①	日本遺産ガイド研修の実施	すでに他の活動をされている語り部（紀伊山地の霊場と参詣道、南紀熊野ジオパーク）を中心に、日本遺産を含めてエリアの語り部として活動できるよう研修等の教育を実施（インバウンド対応含む）	協議会
②	日本遺産ガイドモニターツアーの実施	上記ガイド研修で会得した知識を、モニターツアーを実施することで、ツアーの行程（構成資産、飲食店・土産物・体験施設）や説明箇所・内容のブラッシュアップを図り、他のガイド等との情報の共有を図る。	協議会 ガイド団体
③	ガイドモニターツアー販売方法の改善	現状は各観光協会へ電話受付となっており周知不足であるため、予約サイトへの誘導等販売方法の検討を行う	協議会 ガイド団体
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	日本遺産ガイド研修 開催実績		0 回
2020 年			0 回
2021 年			0 回
2022 年	日本遺産ガイド研修 開催実績		5 回
	日本遺産ガイドモニターツアー実施		2 回
2023 年	日本遺産ガイド研修 開催実績		5 回
2024 年	日本遺産ガイド研修 開催実績		5 回
事業費	2022 年：100 千円 2023 年：100 千円 2024 年：100 千円		
継続に向けた事業設計	和歌山県および構成市町からの負担金により事業実施 他のガイドとの料金のバランスをとりつつ、ガイド料を設定し、収入を確保し事業継続に繋げていく。		

(7) - 4 整備			
(事業番号4-A)			
事業名		普及、活用事業	
概要		鯨肉を活用したメニューの開発や紹介、構成資産や飲食店を巡るサイクリングでの周遊コースの設定・紹介	
	取組名	取組内容	実施主体
①	説明板、案内板の整備	各拠点に整備している説明板、案内板については、情報の更新を含め再整備が必要なものについては、再整備を図る。また整備が必要な箇所等については、関係者と調整のうえ、整備を行う	協議会
②	鯨肉料理提供店舗の拡大	鯨食文化はストーリーの一部であり、より気軽に楽しんでいただけるよう、鯨肉を活用した新たなメニュー開発の支援	協議会 飲食店等
③	鯨肉料理提供店舗紹介ツールの整備	鯨肉料理を提供する店舗をまとめたパンフレットを作成することで、鯨肉料理の普及促進を図るとともに、域内の周遊促進・滞在時間の延長を図る	協議会
④	サイクリング・周遊マップ整備	構成文化財や関連施設を徒歩やサイクリングで気軽に周遊できるマップ等の整備を行い、地域内での滞在時間の延長・消費の拡大を図る。	協議会
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	くじらランチメニュー数 ※「くじらキッチン」開発メニュー数		6 商品
2020 年			9 商品
2021 年			9 商品
2022 年	鯨肉料理提供掲載店舗数		20 店舗
2023 年	鯨肉料理提供掲載店舗数		25 店舗
2024 年	鯨肉料理提供掲載店舗数		30 店舗
	サイクリングコース		5 コース
事業費		2022 年 : 300 千円 2023 年 : 300 千円 2024 年 : 300 千円	
継続に向けた事業設計		和歌山県および構成市町からの負担金により事業実施	

(7) - 5 観光事業化			
(事業番号 5 - A)			
事業名		日本遺産ストーリー体験事業	
概要		地域内外の人々に日本遺産のストーリーを体験してもらう事業を実施し、エリア内での消費拡大や経済効果を生み出す	
	取組名	取組内容	実施主体
①	ウォークツアーの販売、ウォークイベントの実施	既存の観光協会等で受付しているウォークツアーの内容見直し(同エリアの熊野古道、南紀熊野ジオパークを巻き込んだ内容等)し、ウォークイベントの実施	協議会
②	ファミリー層向け周遊企画の実施	土産物店や道の駅での消費拡大や、鯨肉料理提供店舗での食事、構成文化財を広域的に巡り、ストーリーに触れる企画として、スタンプラリー等の取り組みを実施	協議会
③	既存コンテンツとの連携	ホエールウォッチングやシーカヤック等の体験事業者と連携し、体験前に構成文化財や情報拠点でストーリーに触れていただき、理解を深めていただく取り組みを実施	体験事業者協議会
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	日本遺産ガイド活動件数		11 件
2020 年			11 件
2021 年			12 件
2022 年	日本遺産ガイド活動件数 スタンプラリーの参加人数 事業者・地域向け研修会の開催		13 件 80 人 2 回
2023 年	日本遺産ガイド活動件数 スタンプラリーの参加人数 ウォークイベントの開催		14 件 90 人 2 件
2024 年	日本遺産ガイド活動件数 スタンプラリーの参加人数 ウォークイベントの開催 事業者・地域向け研修会の開催		15 件 100 人 2 件 2 回
事業費		2022 年 : 1,000 千円 2023 年 : 500 千円 2024 年 : 100 千円	
継続に向けた事業設計		和歌山県および構成市町からの負担金により事業実施	

(事業番号 5-B)

事業名	体験コンテンツの開発		
概要	くじらの博物館でのイベントメニュー増加を図り、増加傾向である入館者数をさらに伸ばす		
	取組名	取組内容	実施主体
①	くじらの博物館でのイベントメニューの開発	くじらの博物館では様々なイベントメニューを展開しているが、さらなる入館者数増加を目指すため、協議会・くじらの博物館が連携し新たなイベントメニューの開発に取り組む	協議会 くじらの博物館
②			
③			
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	太地町立くじらの博物館入館者数		103,768 人
2020 年			88,041 人
2021 年			103,968 人 ※
2022 年	太地町立くじらの博物館入館者数		105,008 人 ※
2023 年	太地町立くじらの博物館入館者数		106,058 人 ※
2024 年	太地町立くじらの博物館入館者数		107,119 人 ※
事業費	2022 年 : — 2023 年 : — 2024 年 : —		
継続に向けた事業設計	※2021 年度の入館者数は 2022 年 2 月末時点。2022 年度以降の目標値は、2022 年 3 月以降に改めて設定する		

(7) - 6 普及啓発			
(事業番号6-A)			
事業名	学校教育との連携、普及啓発活動		
概要	生徒への教育プログラム、体験メニューを県内外へPRし、教育プログラムや体験メニューを経験してもらい、日本遺産や地域の捕鯨文化の理解を深めていただく		
	取組名	取組内容	実施主体
①	新たな体験メニューの構築	教育旅行向けの多人数向け体験メニューを開発。定員超過する場合は、複数グループに分けて、他のメニューを体験するなど効果的に体験できるようなフローを検討	体験事業者
②	地域住民向けセミナーの開催	地域文化伝承、地域案内等のスキル向上のため、観光客と接する宿泊事業者、飲食事業者を含む地域住民向けセミナーの開催	協議会
③	体験メニュー紹介パンフレットの更新	①の案内ツールとして活用できる体験メニュー紹介パンフレット整備を行う	協議会
④	修学旅行誘致事業	県内外の学校や旅行会社を訪問し、熊野灘エリアへの修学旅行、教育旅行を採用してもらえる取り組みを実施	協議会
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	くじらの博物館における教育プログラム受講人数		—
2020年			321人
2021年	太地フィールドカヤック体験メニュー利用者数		3,854人 ※
	くじらの博物館における教育プログラム受講人数		560人
2022年	くじらの博物館における教育プログラム受講人数		610人
2023年	太地フィールドカヤック体験メニュー利用者数		822人 ※
2024年	くじらの博物館における教育プログラム受講人数		660人
事業費	2022年：600千円 2023年：100千円 2024年：100千円		
継続に向けた事業設計	和歌山県および構成市町からの負担金により事業実施 ※2020年、2021年はコロナ影響により、和歌山県内の学校が県外への旅行を取りやめ、県内への旅行に変更したため、急激な利用増加となっている。2022年以降はコロナ前の2019年の実績に対しての目標設定とする		

(7) - 7 情報編集・発信			
(事業番号 7 - A)			
事業名		HP 等における情報発信	
概要		日本遺産のストーリーに関する基本情報や、エリアのイベント情報をHP 等において情報発信する	
	取組名	取組内容	実施主体
①	新たなモデルルートの構築及び発信	新たな観光資源・体験・飲食店（メニュー）を付加したモデルルートを再構築するとともに、徒歩やサイクリングで構成文化財や関連施設を巡るルートを整備し、発信。周遊マップ等の整備を行い、さらに土産物店や道の駅での消費拡大や、鯨肉料理提供店舗での食事、構成文化財を広域的に巡り、ストーリーに触れる企画として、スタンプラリー等の取り組みを実施	協議会
②	モデルルートの発信	県、観光連盟が持っている媒体・HP 等で既存の事業に関連付け、モデルルートや構成資産を紹介することで、様々な利用者に対し訴求できるようにする。インバウンドにも合わせて訴求	県、市町村 観光連盟
③	総合ガイドマップの更新	総合ガイドブックに掲載している構成文化財や観光地、宿泊施設の情報を更新し、データ版としてウェブサイトに掲載する	協議会
④	ウェブサイトの継続的な更新	ウェブサイトを継続的に更新し、エリアを訪れるうえで必要となる構成文化財や観光地の基本情報を最新のものに整える	協議会
⑤	SNS による情報発信	Facebook ページにより、エリアの情報発信やイベント情報を発信し誘客につなげる	協議会
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	ウェブサイトのページビュー数		84,874 p v
2020 年			120,365 p v
2021 年	Facebook ページの発信件数		7 件
2022 年	Facebook ページの発信件数		12 件
2023 年	ウェブサイトのページビュー数		130,000 p v
2024 年	Facebook ページの発信件数		12 件
事業費		2022 年：100 千円 2023 年：600 千円 2024 年：100 千円	
継続に向けた事業設計		和歌山県および構成市町からの負担金により事業実施	